

戯曲

「草の家」

守安 久二子

● 登場人物

藤井 陽（ハル）六十七歳

長男悟志に嫁いだ。

悟志亡き後、義母の芳と広い旧家に暮らす。
趣味は短歌。（会話にのみ登場）

藤井 悟志（サトシ）
藤井家長男。享年 六十七歳

藤井 芳（ヨシ）八十九歳
藤井計機

「藤井計機」通称はかりやを守り、悟志たち四人の息子を産み育てた。
平成後半の地方都市。昭和からの市町村合併により、政令指定都市となつたが、昔からの独自の街並み文化・伝統が根強く残る町。武家屋敷跡や紅葉の美しい庭園を町内に保有し、同県内からの観光客もまばらに訪れる。

旧商家の門構えのまま残る「藤井計機商店」。

通称「はかりや」の藤井家。通りから商店の間口を経て、つなぎ間と奥に台所、居間と仏間、仏間の奥に離れがある。
本家跡取りである男4人兄弟の長男、悟志が、胃ガンで二年前に急死している。

季節は春。今年の夏は、その三回忌が執り行われる。

藤井 浩次（コウジ）六十八歳
次男。東京在住。社長をしていた。

悟志亡き後、藤井の家督を継がなくてはと気持ちが逸つていて。

藤井 昌枝（マサエ）六十五歳
浩次の妻。同郷の浩次と見合結婚。

藤井 幸雄（サチオ）六十三歳

三男。独身。関西で大学教授をしていた。
趣味は自転車。関西弁もどき。

藤井 靖（ヤスシ）五十九歳

四男。地元で就職。この春定年を迎える。
実家に車で二十分钟左右の場所に住む。

藤井 恭子（キヨウコ）五十八歳

靖の妻。（会話にのみ登場）

藤井 翔一郎（ショウイチロウ）三十八歳

陽の一人息子。警察官。県内の転勤族。

藤井 光子（ミツコ）三十五才

翔一郎の妻 専業主婦。

藤井 孝（タカシ）七歳

翔一郎の一人息子。

常備薬の訪問販売員

二ヶ月毎に、やつてきては、陽から少額な売上を上げる。

● プロローグ

一昨年、藤井家の長男で陽の夫、悟志が胃がんで急逝した。陽が嫁いだ当時は七人の大家族で、義弟はまだ学生だった。測量器機の小売りや修理をしていた「藤井計機」通称「はかりや」の切盛りは、晩年病弱な義父に代わり、気丈な姑の芳がしていた。そこは時代に取り残されたほぼ開店休業の商店だった。

今、陽をこの家に繋いでいた悟志と一人息子の翔一郎は居なくなり、芳と二人だけが住んでいる。

季節は春。ある日、陽は、体の異変に気づき一人病院に向かう。

足が異様にむくんできたのが気になつたのだ。

近所にある難波医院に行くことは、芳には言わずには来た。芳には戦時中、腸チフスにかかった長女を難波医院の先代に殺されたと近くに吹聴してきた過去がある。

咳もあつたことから、医者は風邪薬を処方して結果を薬のきれる4日後に、聞きに来いと言つた。ところがその日の夕方、医者からの電話で「ご家族」の人を出してくれと言われる。何事かと驚く陽。家族は居るには居るが、家には、私と年寄りだけだと伝える。口ごもる医者。貧血がひどいので、大きい病院での検査が必要、行く病院を決めて紹介状を書くから「ご家族」と取りに来てください。お子さんは?

陽は、「ご家族」と言われ、一瞬頭の中に靄かかかつたような気がした。自分にとつて「ご家族」とは、いったい誰なんだろう。医者

は、私のことについて、私に言えないことを言う相手を連れて来いと言つてはいる。それもできるだけ早く。

そう言えば、自分は、この家に嫁いでから常に、誰かしらの「ご家族」だったようと思う。夫や息子、姑や舅、その息子達の「ご家族」であり続けた。悟志の弟たちが家を出て、家庭を持った後も、毎年盆暮れ正月は、皆家族連れで帰省してきた。

それぞれの都会での愚痴に傾きながら、ずっと絶え間なく家事をし続けることで、陽は藤井の「ご家族」であり続けた。しかし、今の陽にとつての「ご家族」は、どこにいるのかわからない。唯一の同居人である芳では決してない。離れて暮らす息子しか、医者のいう「ご家族」は今の陽にはいない気がした。

陽が入院した週明に浩次夫婦が、帰郷してきた。悟志が死んでから、何かと芳を気にして帰つてくる。病気のことはまだ翔一郎しか知らない。

陽の入院をきっかけに、残された男兄弟（元会社社長の次男の浩次、元大学教授の三男の幸雄、地元にいる四男の靖）が集まる。この夏には長男悟志の三回忌を控えている。

年老いた芳とバランスを崩した「ご家族」達。家を出た人達が思うふるさとの現実は、覆い繁り枯れていく草の家。

陽が、必死に根付こうと守つてきたこの家は、草に覆われ姿の見えない家だった。

● 第一場（五月半）

縁側の見える居間と奥に仏間、台所と板の間挟んで古い店先。

居間、終わりかけの食事を前に、座つたまま舟を漕ぎだした芳。

店先の土間、上がり框。

いやあ、そんなこと言われても、困るわあ。

昌枝 薬屋
ホント、毎年こちらの奥さんには、喜んで頂いてて。

昌枝 薬屋
でもねえ、私じやよくわかないのよ、また今度にしてくれる？

薬屋
それが今月の限定商品で、奥さんの話じやお母様が大好きで買わないと機嫌悪いって聞きましたけど、それで頑張つて今日。

昌枝 薬屋
でも、そんな、困るわあ。

一本だけでもホント、元気になりますから。

浩次 薬屋
浩次、店先に顔を出す。

浩次
おい、いつまでやつとんや、なにごとや。

（溜息）リンゴ酢ですって。

浩次
押し売りか。

薬屋
いやいや、私ども、黄色い薬箱のココ薬品と申しまして、テレビでもおなじみのあの常備薬の、

昌枝
一本三千円ですって。

浩次
はつ？ たけえーわ。

薬屋
いつも、この季節は、こちらの奥様から頼まれてて。

浩次
知らんわ、そんなん。

薬屋
さっぱりして飲みやすいんです。

浩次
二百円や三百円ならともかく、三千円つて、ぼったくりか。

昌枝 薬屋
だからココ薬品は、知つてるけど、さつきから言つてのよう
に、私らここに、いるわけじやないのよ。お義姉さん、今い
ないから。ねえ、私ら昨日帰つたばかりで。

薬屋
帰つたって、どこからですか？

昌枝
東京。

薬屋
東京！ いや、こちらに、お住まいじやないんですか？

浩次
僕、てつきり。

浩次
なんだ、

浩次
こちらに、移つて来られたんだとばっかり。

浩次
なんて、

浩次
おい、いつまでやつとんや、なにごとや。
（溜息）リンゴ酢ですって。
浩次
押し売りか。

昌枝 やあねえ、恥ずかしい。こつち帰ると、こうだからねえ。やっぱり、気がぬけるんでしようかねえ。

薬屋 いやあ、実は、さつきから、心配してたんですよ。いつもの奥さんどうしちやたんだろうって。

昌枝 ねえ、お義母さんなら、わかるかしら。

浩次 （奥に向かつて）おばあさん！ おばあさん！

薬屋 あ、お母さま、いらっしゃるんですね。お元気されます？

浩次 おう。

昌枝 三千円はちょっとねえ。

店の前を近所の人が通りかかつて外に向かつて会釀する昌枝、慌てて店のガラス戸を閉めに降りる。

浩次 あほか。閉めとけ。おい、もう帰つてもらえ、入るぞ。

薬屋 あつ、あ、そういうえば、この前伺つた時、お客様見ました。

昌枝 まあ。

浩次 まあ？ なんな。

薬屋 あ、いや、めずらしいなあつて。

浩次 おい、何言うとん、そこの看板読んでみい。

薬屋 はい、すいません。読ませていただきます「藤井計機商店」失礼いたしました。

浩次 れつきとした商店だ。ここは。

薬屋 いやあ、何年も来させてもらつてるけど、初めてでした。お客様見たの。

浩次 ふん。

昌枝 そうよね、あたしもここ十年以上？ 見たことないもん。

薬屋 なんでも、水銀の体温計を探されてて。

昌枝 へえ。

薬屋 ドラッグストアにないんだそうです。製造中止みたいですよ。知り合いの方に、ここならあるんじやないかって聞いたみたいで。

昌枝 すごい。そういう方もいるのねえ。

薬屋 なんか、ピピつて、ねえ、あの、デジタルのは、信用できな

昌枝 いつて言つてました。

浩次 でも、わかるわあ、最近じや肌に当てないものもあるのよ。

薬屋 そんで、ウチには、あつたんか。

昌枝 奥さん、その棚の奥から出してましたよ。

（腕を面白おかしく振りながら）

浩次 こう、こう、下げる時ふるんが、こう、しましたよね、こ

う、良いそうです。

浩次 浩次、雲の巣をはらうように、並んでいる古い棚の扉を開けて、中から、それらしき小箱を手に取る。

薬屋 結構、黄ばんでますね、はは。

浩次 ここはな、人も店も、もう重要文化財になつとるからな。おい、こんなん売つて大丈夫なんかな。

薬屋 奥さん、お金はいいつて、あげてましたよ。わざわざ来てくられたんだから、どうぞどうぞつて。はは。

浩次 なんやそれ、どつちが客かわからんが。

薬屋 ホントに。いやいや、(笑いだす)

浩次 どうしたなんなら。

薬屋 いやー、その時、そこ空けたら、中にこんな、こんな立派なヘビの抜け殻があつて。

浩次 ほう、そりや、長いこと開けとらんけ。

薬屋 開けた時、あつ、て、言うんですよ。だから覗いたら、僕、本当のヘビに見えて、思わずギヤーって。もう、みんなに大笑いされて。

昌枝 ふふふ。

浩次 情けないのう。大の男が。

薬屋 でも、そのヘビ、ここに居たつてことですよね。その棚に。

昌枝 あーやめて。

薬屋 それで、奥さんがそーつと。皮。破らないように、こう、はがして、取つて。ええ。

昌枝 そうよ。あれは、ほら、縁起がいいのよ。お金が。

薬屋 はい、お金が貯まるつて、お客様が喜んで持つて帰られました。財布に入れるつて。

昌枝 おいくつぐらいの方?

薬屋 まあ、いいお客さん。

昌枝 はい、そうですよね。ふふ、で、ちらも、どうか。はい。

薬屋 (上目使い) お願ひします。

昌枝 え? やだ。

薬屋 まんまと乗せられてるが。

昌枝 いやいや。それ以外にも、えつと、それとか、ビーカー?ですか? そこの試験管と台も部屋に飾るつて買ってましたよ。

薬屋 なるほどねえ、そういう楽しみ方あるのねえ。

昌枝 確かに、そう言われてみれば、おしゃれですね。使い方によつては。えー、このお店とかも、雰囲気ありますしねえ。

浩次 おう、だいぶ傾いてるがな。もうこんなボロボロになつてしまつて。子供んころは、広く感じたけどなあ。しょっちゅう人が来てて。

薬屋 へえ、そうなんですか。

浩次 上の葡萄農家やらが、農薬するのに天秤で薬品、温室の温度計買いにきたり箱詰めするのに台秤の注文がきたりのう。病院とかにも、定期的に、こんなもん配達しとつた。トラックの荷台に乗せてもらうんがうれしゅうて喜んで付いて行つたわ。おやじがまだ元気だつたからなあ。

浩次 おやじは、修理の資格も持つとつたから川元の工場へもよう行きよつた。すぐれ工場があつてなあ、おもしれえんじや、機械から、ストローみたいなんが、ぴゅぴゅぴゅ出でくるんよ、そりや、夢中になるが子供は。ここに居つたら退屈することなかつたけどなあ。

間 薬屋 あの。

浩次 はあ、もう。（溜息の後、奥に向かつて）かあさんつて！

薬屋 この季節限定なんですよ。お好きな濃さに薄めてもらつて。

昌枝 ホント、疲れ取れますから。

でも、私らじや。

浩次 いけんわ、ばあさん、また耳聞こえんなつとる。

耳にも効きます。

浩次 はは、すいません。でもほんと、毎年三本も、買つていただいて。

浩次 三本？

薬屋 ハイ、いつつも。お母様？ がお好きだそうで。ありがたいことです。

浩次 三本でか。陽さん年金暮らしなんに、ようまあ。

昌枝 また、嫌味言われてたんじやない？ なんも買うてくれんじやなんだ。

浩次 ああ、もう、いい。わかつた。めんどくさいから、三本。わし、買うちやるわ。おい、財布。

昌枝 ちょっと。

薬屋 わー、ありがとうございます！

昌枝 浩次 一本だけにしたら？ ねえ。

薬屋 いいから。財布！ どうせ、他のもんも飲むじやろ。

浩次 あ、そうですね。そうですよ、ご主人。負けてられませんよ、なんだつたら、四本にします？ とか、言つたりして。

昌枝 浩次 ほん？

薬屋 いや、冗談です。嘘です嘘。

浩次 わしもな、金だけはなあ、あるんよ。困つたことにな。

薬屋 あ、もしかして、そちらのお財布にも、ヘビの皮が入つてゐんじやないですか？

浩次 （財布を覗きながら）おう、なんやかや、入つとるぞ。病院の診察券、請求書。ようけ入つとる。何でも来いじや。

薬屋 じや、ケースごといきましょ。つて、いやいや。

昌枝 あなた、若いのに、達者ねえ。驚くわ。

薬屋 はは、これも、仕事なんで、スマゼン。

（お金と商品の受け渡し）

浩次 ハイ、ホント、ありがとうございます。

薬屋 どうせ、余計な金じや。

浩次 いや、いや、またあ。また、二か月後に、参りますんで。次も、お薬の補充させていただきます。本当に、お疲れのところありがとうございました。

浩次 おお、ほんとに疲れた。もう、こんでええから。

薬屋 またまた。あの、今日は、お会いできませんでしたけど、

奥様とお母さまにもどうぞ、くれぐれもよろしくお伝えください。

浩次 ほん。

薬屋 はい、じゃ、失礼します。ありがとうございました。

居間へ移る二人。

三本のリンゴ酢ドリンクのパックを台所へ運ぶ昌枝。

浩次 おばあさん！

終わりかけの食事、座卓の前で、うとうとしていた芳。

座つて、食卓にあつたビールを飲む浩次。

芳 はあ、どしたん？ 客か？

浩次 薬屋。（昌枝に）おい、冷えてるんくれ。

芳 薬？ はあ、もう飲んだろう。さつき、たしか、

浩次 ジやのうて、陽さんが頼んどるやつの。

芳 ああ、あれ、きた？ あん富山の。

浩次 おい、あいつ、富山から来とんか。

昌枝 まさか。本社が富山なんじやないの？

浩次 ほーん。

芳 ありやあ、富山の薬売りじや。あん若い男の子じやろ？ 髪がこげな。（髪をたてる仕草）

浩次 ほん、調子のいい奴じや陽さん騙されどるは。ようけ、買うとる。

芳 ほう、そうかな。若い男には、いいんよ。あん人。

浩次 ほお。（苦笑い）

芳 あたしら、いつこもあんな声、出してもうたことがねえ。

昌枝 ふふ、ほら、お義母さん。リンゴ酢ですよ。

芳 ほお、ああ、あれ、これ、きたんか。

浩次 うまいん？

芳 ほん、好きなんよ。ここが（喉をさすつて）ここが、さつぱりする。

浩次 へえ。ほんまか。ほんならええが。わし、買うちやつたけえ。

芳 ありがと。陽ちゃん、たまにしか、買うてくれんの。

浩次 この季節だけなんだ。三本あるけえ。しつかり飲み。

芳 あれまあ、そんなに、ありがとねえ。浩次がおつてくれる

と、楽しみがええわ。

浩次 この人が、お義母さんが飲むだらうて。

芳 一本 三千円だと。

浩次 ほう、そんなにするん。高いんじやなあ。知らんかつた。

浩次 わし、金はあるんよ。使い道がわからんのよ。困ったもんじ
や。
昌枝 この人、いつもこんなことばっかり言つて。
芳 ほうかな、そんなにあるんかな。
浩次 ありすぎてな、困つとんよ。北朝鮮でも買ううちやろうかしら
ん。
芳 そりやあ、まあ、大きくてたのう。
浩次 なごやかな三人の笑い声。
電話が鳴る。傍に居た芳がよっこらしょと出ようとすると。
慌てたかんじで受話器を取る浩次。

浩次 もおし、翔坊？ おうう、わしじや。うん、した。ばあさん
から聞いて、うん。どうなつ、うん、そう、驚いたわ。え
つ、ほう……（溜息）ほう。そうか。えらいまた。うん、
おう、そうじや、ばあさん怒つとるし、おう、まあわかる、
おう、わしから。うん……うん、わかつた。まあ、大変じや
けど、あまり無理すんなよ。明日、わしらも、国立病院行つ
てみるは。うん、こっちのことは、うん、そうじやな、……
そうか、わかつた。ん、じや。
(昌枝に) 翔ちゃん、翔ちゃんじや。(黙つてうなづく昌枝)
芳 受話器を置き再びビールを飲む浩次。
少しの沈黙。

芳 翔ちゃんじやろ？ なんて？ 陽ちゃん。
浩次 あんな、おばあさん。あんな……しつかり聞きよ。
昌枝 何？
芳 陽ちゃんじやろ？
浩次 うん
芳 なんて？ 死ぬるん？
昌枝 やだ。
芳 はあ？
昌枝 なんで？
浩次 知らんわ。
芳 なんでまた、
浩次 わしに聞かれても、知らんて。詳しい検査、これからし
い。
芳 白血病。
昌枝 それって、確かなの？
浩次 らしいわ。
芳 いつから？
昌枝 本人は、ずっとだるかつたらしいは。たまたました血液検査
でわかつたらしい。
浩次 手術とかするの？

浩次 まだ、わからん。血液の癌つてやつよな。
 芳 えらかったんじやろうか。
 浩次 たぶんなあ。
 芳 ……少し前、あん人、足が腫れて、困つとつた。
 浩次 そうか。
 芳 庭にな、ネギとりいこう、そん時、サンダルが、いいように
 浩次 履けんで。
 芳 ふーん。
 浩次 えらかつたんじやろうか。
 芳 風邪か思うて、いつた難波の検査でわかつたらしいわ。
 浩次 難波つてあの難波か。
 芳 今は、国立でしょ。
 浩次 お、明日、行くぞ。
 昌枝 翔ちゃんは?
 浩次 病院で会う。
 芳 ……なんも言わんで。
 昌枝 えく、信じられない、ショック。
 浩次 おばあさん、取り合えずな、詳しいことなんもわからんか
 ら、わしら、明日、国立行つてみるは。また、色々わかつた
 ら、教えるけえ。本人は、しつかりしとるらしい。翔一郎が
 言つとつた。
 芳 翔ちゃんがや。
 浩次 来週、なんでも赤十字の大会に皇室が来るらしい、それの警
 備に駆り出されてめちゃくちゃ忙しいらしい。

昌枝 あらあ、お巡りさん大変だ。
 浩次 しようがねえが。
 昌枝 この間、お兄さん逝つて。お義姉さん、あーショック。
 浩次 そりやあ、みんなショックじや。
 芳 ……どうしたら、いいんよ。
 浩次 なんが。
 芳 隣の須^す西の嫁が、
 浩次 どしたん。
 芳 入院は、私のせいじやて。
 浩次 はあ?
 芳 なんで、そんな。
 浩次 ふざけとるんよ。昔つからあん嫁は。
 昌枝 なんで、そんなことになんかな。
 芳 それでも、なんか、お義姉さん、なんか、あつたでしょ
 浩次 うに。
 昌枝 何日か前、帰るつて電話した時、そんなこと何にも言つてな
 かつたのよ。いつも通りで、普通に。
 芳 そうだなあ。陽さんなんか言うとつた?
 浩次 いやあ、あん人は、昔つからじや。大事なことは、なんも言
 わん。なんも言わんで。悟志ん時も。
 芳 そんなことはなかろう。
 浩次 いよいよダメになつてやつとよ。最初はできもんが見つかつ
 たから切る言つて。
 芳 いいよダメになつてやつとよ。最初はできもんが見つかつ
 たから切る言つて。

浩次 まあな、いろいろじやから。本人が一番驚いとんじやから。
 芳 翔ちゃんも、急に病院連れて行くつて来て、それつきり。そ
 のまんま、入院で。

昌枝 じやあ、お義姉さんも、入院するつもりなんて。

芳 翔ちゃんも、後で後でつて。まだ、わからんからつて。

浩次 兄貴逝つて、これからいろいろなあ。

昌枝 治るんでしょ？

浩次 じやけ、わからんて。色々、種類があるらしいわ。同じ、白
 血病でも。

昌枝 急性は、ダメだつて聞いたことある。でも、渡辺謙とか治つ
 てるんじゃない？ ねえ。

芳 助からんのじやろうか。

昌枝 一人になつて、やつとこれから楽しめたのに。急性だつた
 ら、無理みたいよ。ねえ。

浩次 じやから、今ここであれこれ言つてもはじまらんから。
 何べんも言わすな！

沈黙

芳 (つぶやくように) あん人は、ほんま何もいわんで。

浩次 おい、わし、風呂入るぞ。(立ち上がる)

芳 浩次 ほん、ほんなら、わたしは、先に休みます。よ。

浩次 はい、どうぞ。

昌枝 あなた、

浩次 着替え、風呂場、置いといってくれ。

昌枝 いいの？

浩次 そんなこと、おばあさんが心配せんでも。翔一郎がおるが。
 芳 あんたらもじき東京、戻るし。

昌枝 まあ、明日にしようや。わし、もう、風呂入つて、寝るぞ。

浩次 そうね。

芳 こんな年寄り一人にしてから。

昌枝 え？

芳 どうせ、

浩次 あのな、かあさん、わし、風呂入つてニュース見にやおえん
 の。とりあえず明日、明日にしよう。おい。

芳 こん家の跡取りは、何で、

昌枝 お義母さん、また、明日にしましよう。お先にお風呂どう
 ぞ。

芳 いんや、これから押ませて、もらいますから。

浩次 ほん、ほんなら、わたしは、先に休みます。よ。

芳 はい、どうぞ。

昌枝 あなた、

浩次 着替え、風呂場、置いといってくれ。

昌枝 いいの？

顔の前で、小さく手を振り、浩次奥へ去る。

一人、仏壇の前にすわる芳。

手をあわせ、ぶつぶつお経を唱える。

おりんの音。

芳

悟志さん、私やあ困るが、こんなおばあさん一人にさせんで
よ。頼みます。頼みます。

お守り下さい。南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛……。

台所で洗い物を終えた昌枝も去る。

仏壇の前の芳。

おりんと数珠の音。

● 第二場（翌日 午後）

台所、慣れたかんじで、冷蔵庫から缶ビールをだして飲みほす靖。手に持った団扇で、扇ぎながら外の様子を伺う。

手ぬぐいを被つた芳が、絹さやを積んだかごを抱えて、縁側からよっこらしよと上がつてくる。

あれまあ、靖さん。どしたん。

うん、まあ（芳の絹さやを見て）あー、

みんな、恭子ん里、帰つとんよ。

トシハノ時門レ
トシハノ時門レ

ぎこちなく笑う靖。

浩次と昌枝がバタバタと上がつて来る。靖、慌てて、空き缶をゴミ箱に捨てる。

浩次 やれ、帰りました。帰つたよ。今日はまるで夏じや、暑かつたあ。

たへせんじ。

あれ、あんたら、靖も一緒に行つてくれたん？ 休んだん？

浩次 おい昨日のあれ、出してみい、ばあさんの好きなやつ。
あんなあ、靖、お前が、もつと気を付けとかんと、いかんの
で、ほんまは。

靖 なんな、たまにきて、偉そうに。

浩次 えらいから言つとんじや。まつたく、どいつもこいつも。幸
雄は幸雄で、フラフラ、タベ電話したら今、鳥取砂丘だと。
おふくろ一人になつとんのに、すぐけー言つといた。

芳 あ、さつちやんも帰つて来るん?

浩次 知らん、當てにならん。おっさんが一人、砂丘で何しとんの
や、言うたら、「カニと戯れてる」てぬかしやがつた。

昌枝 え? カニ? 今?

靖 (苦笑い) たぶん「われ泣きぬれてカニと戯る」

昌枝 あー、握ればさらさらと、あれ?

浩次 あほか、ちやうは。

靖 もういいが。兄貴はいつもそう、今は、私たちのことより、陽
さんでしょ。

昌枝 やつぱり、白血病ですつて。先生はつきりおっしやつた。

芳 ほう、やつぱりや。

靖 見た目は、変わらんのになあ。

芳 はあ、……治らんの?

浩次 あんな、はつきり言つて、治らない。あきらめろと。
ほーん。

芳 輸血で、人ん血を入れるんか。

浩次 おう、今日もぶら下げとつた。

芳 まあ、難しいらしいは。治るんは。

浩次 明日から、抗がん剤の治療するつて。あれはほら、副作用が
あるでしよう。しばらくは入院みたいですよ。

昌枝 ああ、そりや治らんのじやもん。

浩次 すつごくはつきり言うお医者さん。お義姉さんの前で、ね
え。

芳 今頃はあれが当たり前らしいは。陽さんも全部、わかつと
る。

浩次 ふーん。

芳 ほう。

靖 海老蔵と同じ病気じやて。

芳 ほうかな。

浩次 ズケズケいつとたなあ。あの医者。

芳 おう、しつかし、どうするかなあ。

靖 どうするつて言つても。

芳 私も行つた方がいいじやろか。見舞い。

浩次 あ、いや。

昌枝 細菌感染が怖いって、ねえ。
 靖 ああ、厳しかったなあ。
 浩次 あのな、面会するんに、消毒されるは、マスクつけさせられ
 るわ。

芳 ほお。

昌枝 母さんは、行かんほうがええんと違う?
 芳 ほうか。

昌枝 お義姉さん、微熱があつて。あ、お義母さん、お義姉さんが
 出して短歌会から、本届いてます?
 芳 いんや、見とらん。

昌枝 え、そうですか。

芳 ほうか、行かんほうがええか。

昌枝 今月の分、来たら届けて欲しいって。

浩次 次行くもんが、便で持つてきやええが。そうだなあ。行かん
 ほうがええかもなあ。(小声) かあさん行つたら、余計悪うな
 るかも知れん。ふふ。

昌枝 昌枝が浩次の足をたたく。

私もな、一人じやよう行かんし、足もこげなじやしなあ。

靖 ええよ。行かんで。

芳 そうじやなあ。

浩次 ほんまじや、これうめーが。

昌枝 さつぱりしますね。

芳 かあさんも飲み、好きじやろ。
 昌枝 ほん、ありがと。

浩次 雨か。

昌枝 ぼつぼつと、トタン屋根部分におちる雨。洗濯物を入れよう
 と縁側へ降りる昌枝。

靖 ごはんにしましようかね、靖さんも食べていく?
 昌枝 いや、私はいいです。(がこの絹さやに目が行く)
 靖 ふふ、食べていきなさいよ、おふくろの味。

昌枝 あのなあ、靖、わしも、もう七十じやあ。

浩次 はあ。

芳 翔ちゃんには、会えたん?

靖 いや、こん。もうなあ、しんどい。

芳 会えんかつたん?

昌枝 (縁側から大声) なんか、仕事で無理だったみたいですよ。
 浩次 電話が。なんか呼び出し、ほら、皇室が、来るから。
 芳 あのな、翔坊はな、わしらみたいな暇人じやないけな。
 浩次 そうじやなあ、忙しいわな。

芳 お国を守つてもらわな、な。

浩次 ほう、お国をなあ。

芳 そいで、一所懸命働いて、わしらの年金払つてもらわにやお
 えん。

芳 はあ。

靖 私も年金は払つてますよ。国は守らんけど。

浩次 翔坊、ちゃんとやつとんかな？ ああいうところは、階級社会じやから。あいつも兄貴と一緒に、気の小さいところあるしな。

靖 悟志さんは、なんで止めんかったんじやろ。こんな時代に。

浩次 帰つてくるんがうれしかったんじやろ。良かつたんか、悪かつたんか。そのうち、戦争にも駆り出されるぞ。

芳 なあ。

浩次 芳ん？

芳 陽ちゃん、どうなるん。

浩次 どうつて

芳 せーでも、このままじやつたら、

雨の音強くなる。

昌枝 大変、二階の窓空いてた。

浩次 心配せんでも、大丈夫だから。

靖 おい、靖、車回しとけ濡れるぞ。

靖 いや、もう帰るは。

浩次 食つて行つてやれよ、めし。恭子さんおらんのじやろ？

靖 いや、（呼ぶ）かあさん。

浩次 気が付かず、一人仏壇に向かい手を合わせ今日の報告する芳。

靖 哉が、あぐらをかいて座りその背後から団扇で扇いでやる。

浩次 悟志さん、あんた、なんで、（何かしらブツブツ嘆いている）

芳 悟志の位牌を撫でる芳。

靖 芳の背後から、軽く手を合わせて帰ろうとする靖。

浩次 悟志と目が合い、二人苦笑い。

靖 ジや。

靖 ん？

浩次 お前、どうするつもりだ？

靖 何が。

浩次 何つて、これからのこと。おふくろもこんなじやし。

靖 ……。

浩次 もう定年じやろ？

靖 どうもせんよ。別に。

浩次 次どつか行くんか？

靖 浩次 さあ。

浩次 おふくろ、一人になるかもしけんぞ。

靖 浩次 まだ、わからんが。

浩次 なんか考えが、あるんか。

靖 浩次 考えつて？

浩次 お前が、一番可愛いかつただろうからな、おふくろは。

靖 浩次 なん、知らないよ、そんなん関係ないだろ。

浩次 お前の家、もう、ローン済んだんか？

靖 浩次 は？

浩次 お前が一番近いしな。この家、そうは言つてもこりじやな、旧家じやし。知らんもんおらんからな。

靖 浩次 ……まあ、そうねえ。

浩次 わしもな、考えるんよ。悟志さん死んでな。幸雄も頭はええんかも知れんが、大学黙つてやめて、自転車で、日本中うろうろ。

靖 浩次 東京もなあ、

靖 浩次 （あきれたように溜息）兄貴が帰つてくればいいが、帰りたいんなら。かあさんも喜ぶんと違う？ どうせ、二束三文だろ、こんな家、売れても。

靖 浩次 ……。

靖 浩次 まあ、売れる訳ないけどな。

靖 浩次 売るやこ、ばあさんの前で言うなよ。

靖 浩次 それでも、誰も住まん家置いててもしようがないよ。

靖 幸雄 ……。

靖 幸雄 もし売れたら、そん時決めればいいが。家は、兄貴んとこと違つて、下はまだ金かかるからな。樂じやないです。

浩次 あなたたちと違つて、定年になつても、私らまだ年金でないし。

靖 幸雄 あなたたちと違つて、定年になつても、私らまだ年金でないし。

靖 幸雄 店のガラス戸が開く音。

靖 幸雄 チヤリリダーモヤ姿の幸雄。

幸雄 すみませーん、この天秤ばかりくださーい。

幸雄 すみませーん、この天秤ばかりくださーい。

靖 幸雄 ヘルメットやウエアが黒く光つてゐる。日に焼けて満面の笑みで、ロードバイクと一緒に入つてくる。

靖 幸雄 驚く浩次と靖。

靖 幸雄 階段からバタバタ降りてきた昌枝。

昌枝 あらあ、さつちやん！

幸雄、ロードバイクを入れながら商号の看板を見やり、

幸雄 いやあ、わが町ふるさと「藤井計機」は健在なりや。

幸雄 わあ、最近この辺でもよくみるわあ、こういう恰好したおじさん。

幸雄

オーマイブラザー。はかりやの三男坊が帰つて参りました。

浩次

なんだ、コオロギみてえな恰好して。このあんごうが、頃のこのこ、買え！ 天秤ばかり、一億で売っちゃる。

芳 さつちゃん！ よう、まあ、元気しよつたん？ よう焼け
て、まあ。

てまあ

靖雄（大笑いしながら）かあさん、ただいま。

う？ はい、この通り。かあさん、また少し小さくなつたんぢや

三九

芳、悟志の位牌は、離さない。

浩次 おせーわ。わしや、ほんま、でかいコオロギが入ってきたん

幸雄 かあさん。悟志兄さんは、はい、とりあえず、

三
友

靖 ああ？ まあ、しゃあないけど。
幸雄 ヨオロギじやなくて、カニと戯れてたんでしょう。
幸雄 そう、

鳥取の砂丘の磯の白砂に
われ泣きぬれて

芳幸雄 まずは生きてる人からや、大事にせんとね。陽さん、大変やな。

ほん、ほんとになあ、私しやあなんも（幸雄に抱き着かんばな。

ほん、ほんとになあ、私しやあなんも（幸雄に抱き着かんば
りこぬりま、り）わい、二しよこ濡して、雨こぼうこい？

昌枝 へえ、それで？ 握ればさらさら、だつけ。じつと手を見て
たの？

はは、そしはまご、別の次。

浩次 幸姫 はは それはまた つたく。 別の歌

悟志の位牌を持ったまま、立とうとしてよろける芳。

昌枝

芳雄　すぐ来いって言ったやん。
風邪ひいたらどうするん、お風呂、風呂沸かしてやつて。
ら、早よ、陽ちゃん！

芳 陽ちゃん！ ジヤのうて、ほれ。
 浩次 （昌枝に目配せ）おい。
 靖 この人は、昌枝さん。かあさん、陽さんは病院。
 幸雄 あー、いや、はいはい、ええって。シャワーあびるは。ちゃんと着替えてくるから。待つてて、ね。
 芳 奥へ行こうとする幸雄、呼び留める芳。
 幸雄 さつちゃん！
 芳 ん？
 幸雄 絹さや。
 芳 絹さやがな、ようけこと取れてな、ほれ。
 幸雄 ああ、そんな季節やね。
 芳 季節のもんじやからな、卵とじな、しよう思うんよ。いりこんお汁、してな。
 幸雄 う、うん、そうね、ありがとう。はは。（奥へ向かおうとする）
 （幸雄がもう行つたと思つて昌枝達に）あん人、黒うなつてあたしやあ、アフリカん人かあ思うたあ。
 芳 真面目に驚いている芳。顔を見合わせ笑う靖と昌枝。
 頭を搔く浩次。
 芳 ばつが悪い感じで荷物を抱え、風呂場へ消える幸雄。

芳 （急に思い立つて）陽ちゃん、さわら！ さわらのお刺身買うておいで、陽、じやのうて
 昌枝 昌枝です。
 芳 （怒つたように）誰でもよろしい、（財布を取り出し、昌枝に渡しながら）背じやのうて、腹の方、その方が身がなあ、やわいから。地のもんが、ありやあええけど。モ貝もな、寿司にしてもいいし。
 昌枝 え？ 私が行くんですか？
 靖 あ、行きます、行きます。はい、はい（昌枝から財布を取つて）やつぱり、刺し身は、さわらが一番、ついでにモ貝ね。
 昌枝 おい、出るときに車入れ替えといてくれ。
 浩次 投げられた車のキーをキヤツチして、何故か嬉しそうに出て行く靖。
 芳 なあ、さつちゃん、浩ちゃんが呼んでくれたんじやろう？
 浩次 ああ、陽さんも心配じやけど、かあさんもな。
 芳 ほう、ほうなあ、ありがとう、ほんにあんたが居つてくれると楽しみがええわあ、ありがとうねえ。
 芳 やにさがる浩次。
 芳 台所へ行こうとして戻り、

芳 煙へ行つてそんまんまじやけなあ、ちーつと着替えてこーか
な、髪でもといて、なあ、浩次さん、なあ、おじいさんに見
えるん？

浩次 (バツが悪そうに) あ? ああ。

芳 昌枝さん! 悪いけど、お米洗うといてよお、いつもすまな
いねえ。東京からはるばる来られてんのに。わざわざ。すみ
ませんねえ。ほんと。ご苦労様なことです。

昌枝 ……。

壁 づたいに奥へ消える芳。

昌枝 もう、いや。(腹いせに水道の蛇口を思い切りひねる)

浩次 (冷蔵庫を開けながら) おい、ビールは?

昌枝 知りません。

浩次 冷やしとけ言うたろ? いつつも、わしんことは後回しじ
や。

昌枝 (何かしらぶつぶつ) おい、聞いとんか。

蛇口を閉める昌枝。濡れた手を拭つて、

昌枝 だ、か、ら、自分で飲むビールぐらい自分でしてつて言つて
んのよ! 私はあなたのおかあさんじやありません。

昌枝 東京から二ヶ月おきに、バカみたいにせつせと通つて、家政
婦みたいに使われて、こつちには私の親だつているのに今回
だつてまだ顔も出してやれてない。あなただつて、私の親に
会いに行く気なんてさらさらない。ずーっと言つてるのに。
母が、具合悪いことは知つてるでしょ? 兄さんとこも大
変だから帰つた時ぐらい替わつてあげたいのに。

浩次 ……。

昌枝 私にだつて親はいるのよ! ここから車で一時間足らずのと
こに私の年老いた両親がいるんです!

浩次 お、おう。

昌枝 蔵の戸開けたとこにケースで買ってますから、自分で入れて
ください。

浩次 気迫に押され、しづしづと勝手口から出て行く浩次。

昌枝 誰でもいいつて、ふざけんじやないわよ。

昌枝 昌枝の怒りの米を研ぐ音。

● 第二場（その夜）

暮れかけた居間。

酔っ払いの男兄弟三人が晩酌。

芳は座卓から台所へ行つたり、ごそごそして。

幸雄 かあさん、もうええよ。洗いもんもほつときやええんよ。だから、

「東海の小島の磯の白砂に我泣きぬれてカニとたはむる」

もじつた訳よ。陽さんのこと聞いて、なんか哀しくてなあ。

昔思つたら……。目の前には、広大な日本海、砂浜。

だから、ピンとこないんだよ、普通のひとは。カニだけ聞いても。

浩次 わしは、啄木つてわかつたぞ、あほくさつて思つたけどな。そやけど、あの後、昌枝さんなんか、結局、あれカニ買つてこなかつたの？ つて。

冬でもねーのに、ある訳ねーが、ほんまに、あほうじやけえ。

靖 靖 あー、こんな話、陽さんが聞いたら一番喜ぶだろうな。なんせ表彰されて。（鴨居にかけてある表彰状楯を見上げて）あれも一番喜んだんは、悟志兄だつたやん。送つてきたが、「草の家」。

浩次 靖 陽さんの出した歌集の名。

浩次 ああ、悟志さんが、金出した、いう。

靖 幸雄 僕らの前じや、けんかばっかりしとつたけどな。あの二人。陽さんにだけはきつう当たつてたな。悟志さん。

靖 幸雄 ほんとにな、ようわからんかったよな。あの二人。陽さんにメールしたんよ。久しぶりに。

驚く二人。

浩次 幸雄 お前、陽さんとメールしとんか。

幸雄 幸雄 うん。悟志さん死んでから。なんで？

靖 幸雄 なんて？

幸雄 幸雄 いや、同じ歌、我泣きぬれて、

浩次 幸雄 なんてや。

靖 幸雄 そやから、なんか哀しくて、お義姉さん、大丈夫ですかつて。僕の心情を。

幸雄 幸雄 したら？

靖 幸雄 うん、まあ、幸雄さんは、変わらないねつて。

幸雄 幸雄 だから？ まあ、よろしくつて。

靖 幸雄 あーこのきわら、うんめー。

台所から芳がお盆にのせた皿を運んできて、

芳 せいでも、あん人、急に消えてしもうて。
浩次 縁起でもないことを。消えてりやせんが、入院中。
幸雄 わー、ヌタしてくれたん。

芳 ふん、アサリがあつたけん。モ貝がありやあなあ。バラ寿司
しても、えかつたんじやけど。せいでも、もうな、いいよう
に力がな、一人じや混ぜれんのよ。

靖 (小声) きつと昌枝さんのことじやろ。
浩次 (大声) 消えた言うんは、昌枝んこと?

芳 昌枝はな、何でも、倉田の母親がな、急に具合悪くなつたん
ふん、居らんのじやろ?

浩次 じやて。

芳 ほう、そうかな。倉田から、なんかゆうてきたん。
浩次 知らんけど。

幸雄 かあさん、おいしいなあ、ヌタ。

芳 ほうかな、モ貝がのうてな。

靖 もう、しようがないじやろ、何回も言わないでよ。無かつた
んだから。

芳 ほうなあ、モ貝がありやあ、寿司してなあ、せつかく皆居る
のに。

靖 もう。(笑)

芳 昌枝さんも、あつちもこつちも大変やね。
浩次 あいつの兄貴が居るから心配はいらん。こつちほつたらかし
てから。

幸雄 嫁さんが、みーんな居らんようなつてしまつて。

幸雄 僕には、もともと居らんけどね。
芳 そういうやあ、そうじやつたなあ。(笑) 大学の先生でこんな男
前なんに。

幸雄 浩次 もう、こいつは、大学首になつとんよ。ただのおっさん。
芳 あれ? ほう、なん?

幸雄 芳 そう、ただのおっさんです。(おどける素振り)

幸雄 芳 まあ、なんも聞いて、

浩次 幸雄 一年前、やめた。悟志さん死んだ後。心配するから言わなん
だ。

幸雄 浩次 全く、勝手なことしくさつて、誰のおかげで、今のとこ潜り
込めた。

幸雄 浩次 自分のおかげ。
幸雄 浩次 はあ? わしが、頼んで、うちの大坂の支社長からあんとき
の学部長に口きいてやつたからだろが!

幸雄 浩次 それは、あなたの一人よがり。

幸雄 浩次 断りもなしに、勝手に、やめて。こつちは、赤つ恥かいた
わ。

幸雄 浩次 あのね、兄貴、それ、ちやうから。ずっと言いたかつたけ
ど、大石さんだろ、関係ないから、あの人そんな力ないか
ら、ていうか逆に迷惑だつたから。

幸雄 浩次 知つてる? あの人、今、ゼネコンからの収賄容疑かけられ
て、全くこつちもいい迷惑ですわ!

幸雄 浩次 何、どの口が。泣き言、言いよつたんは誰なら。

芳 雄	浩 次	かあさんじやろ！ 俺は何にも頼 よ、あんたと会うの。
芳 雄	あんたつて、お前、	幸雄に掴みかかろうとする浩次。
芳 雄	靖 雄	靖が止める。
芳 雄	幸 雄	あのね、悟志さんみたいな訳にはい 長男風ふかしても、だめ。次男はざ にらみ合う二人。
芳 雄	靖 雄	まさしくなる芳。
芳 雄	幸 雄	お酒が進む三人。
芳 雄	浩 次	まあ、でも、ねえ？
芳 雄	芳 雄	……何？
芳 雄	浩 次	あんな、かあさん、
芳 雄	芳 雄	ふん。
芳 雄	浩 次	あんな、岩井の山上さん。
芳 雄	芳 雄	ふん。
芳 雄	浩 次	デイサービスにいってるんじやと。
芳 雄	芳 雄	ほう。
芳 雄	だ か ら	だから？
芳 雄	何 ？	何？

浩次	芳	だから、岸本の病院があるう？ あつこの隣、そんな施設ができるところらしいは。きれいなんじやと。
浩次	芳	バスで、迎えに来てくれるんじやて。みんなで歌、歌うそくな。
浩次	芳	一度行つてみるかな。好きじやろ、歌うの。
幸雄	芳	おい、今、そんな話やめえや。
浩次	芳	陽さんわからんしな、一人こん家に居つてもさびしかろう？
幸雄	芳	せいでも、
浩次	芳	わしらが居るときに一度行つてみんかな。岸本クリニツク。
幸雄	芳	やめろって。
浩次	芳	なん、お前はええわ、ゴキブリみたいな恰好して一人、ふらふら。
幸雄	靖	（吹きだし）コオロギじやないん。
浩次	靖	兄貴はいつも、そうやつて、急に陽さんおらんなつて、かあさんの身にもなつてみろ。
芳	靖	さつちゃん。
浩次	靖	ず一つとほつたらかしとい、フラフラしとるくせに、居る時だけえらそう言うな。
浩次	靖	は？ え？ 何、それ、
浩次	靖	あんね、それ、こっちのセリフだわ！

浩次 はん？ お前、近くにおるのに全然顔出してねーくせして。
わしがどんだけ。

あのね、ここは、あんただけのふるさとじやないから。残念
ですけど。

浩次 どういう意味なら、おう？

靖 本当は、帰りたいんだろ、この家に！

幸雄 はあ？ そう。そななんやあ。

靖 そう。東京じや子供らも寄り付かんし、昌枝さんもこっちに
実家があるし、陽さん居ないなら、何でも好きにできるし。

幸雄 へえ？

靖 それか、いつそ売つちやえば？

幸雄 はあ？

芳 売る？

靖！

浩次 ばーか売れるか、こんな田舎。

靖 いや、いや、誰も住まない、ならつていう、
売るつもりはない。

浩次 ふーん、じやあ、帰つてきて住めば？ 帰りたいんだろ？

浩次 (無視して、芳に) わしは、売つたりはせんから。
ちよつと待てよ。この家は死んだ悟志兄さんのもんちやう
の？

靖 かあさん、この家の名義は今どうなつとんかな？
あんたら、何て。(怒つている。)

芳 あほか、かあさん怒らして。

靖 いや、すぐにつて訳じやなくて、
すぐでも、後でも、そんな、人に売るやこ。

芳 心配せんでも、わしがさせんから、母屋は、悟志さんが建替
えしたんじやろうけど、店とか土地はまだ、じいさん名義じ
や。

浩次 は、なるほどね。かあさん、施設に入れて、自分らが乗つ取
るんか。

靖 何？ お前。

幸雄 あんたのやり口はいつもそう。こざかしい。昔つから。

浩次 浩次、持つていた猪口の酒を幸雄の顔に浴びせる。

幸雄 どういう意味なら、おう？ 言いたいことあんなら言つてみ
い。

靖 幸雄、顔に掛かつた酒をなぶつて、じつと浩次を睨む。
二人の顔を見比べてにやつく靖。

幸雄 ああ、言つたるわ。ええか。自分がまだ、嫁さん居ないから
つて、弟の縁談つぶすか？ 普通。

浩次 でた！

靖 あんな、お前、言うけど、わし、そんなはことしとらん、
いーや。

浩次 何で、わしが、そんなことせにやいけんのじや。

幸雄

妬ましかつたんちやうん？ 奨学金で大阪出て、大学院まで行つた弟が。ましてや、結婚まで先にされそうで、あることないこと。

浩次

わしがお前にやきもち焼いたつていうんか。ふざけるな。うぬぼれんもたいがいにせい！

思い立ち、立ち上がる浩次。

浩次

（睨みつけて）相手ん親は知らんかつただろうが。

高くか細い声をあげて泣き出す芳。

幸雄

あー、ちやうから、参つた。

慌てる幸雄。

憮然とした浩次は、一人、店へ降りる。

あら、あら、まあまあ。親の前で。

靖

（その背に）あーあ、かあさん、泣かしたあー。

芳
さつちゃん、悪いんは、私じやから。

幸雄
ごめん、べつに、

すぐそやつて、都合が悪くなると、大声出したり、手出しだり。自分、いくつじや思うどるん。そんなやり方もう通用せんよ。

浩次

ほつとけ。

あなたが手紙で相手の親に、自分の色弱のこと！ さも心配してますみたなふりして、

浩次 そりや兄として、心配してな、お前らの子が女だつたら、
幸雄 そんなタラレバの話、あんたに言われんでも、百も承知でし
た。

芳をなだめる幸雄。
ようよう仏壇の前に座る芳。

浩次の様子を伺いながら、店に降りて行く幸雄。

板床のきしむ音。

間。

浩次は、埃をかぶつた店の棚を手でなぞつている。
幸雄、店の柱を撫ではじめ、背を向けている浩次に、

幸雄
なあ。

浩次 ……。
 幸雄 なあつて。
 浩次 ……んな。
 幸雄 ……もし、この家倒すことになつたら、そりや、もしもだけど
 浩次 だから、なんな！
 幸雄 もし、そんなことになるんなら、この柱、俺に切らせてく
 浩次 れ。
 幸雄 積年の恨みを断ち切つてやんねん。
 浩次 ……（深い溜息）おやじか。
 幸雄 ああ、時々、夢に。

店にある扇風機を回し始める幸雄。

店の中をゆっくり見渡し、

ここ、昼間は、好きだつたけど、夜は、怖かつたあ。

幸雄 ……。
 浩次 大阪の家のこれが、ベッドに当たつてキュキュゅうねん。寝
 てる間に蹴るんかな。

浩次 知るか。

似てるんよ、悪さして、これに、縛りつけ、おやじが、縄占
 める音に。ふ、たまに、うなされて、目が覚める（自分自身
 にあきれて笑いがこみあげてくる）

浩次 （店にある黄ばんだ商品等をいじりながら）悟志さんもよう
 幸雄 縛られとつた。
 幸雄 ああ、俺のこととてとばつちり、（笑）……あなたは、いつもう
 まいことすり抜けて……。
 浩次 わずかに目が合い、口元が緩む二人。
 幸雄 あんな、苦労したんよ。わしも。今じやから言うけど、今さ
 らじやけど。今、みたいに、個性じやゆうてもらえる時代じ
 ゃなかつたからな。あんな、わしは、これ（目）が原因で、
 「日立」落とされたんじやから。決まつてたんじやから、ホ
 ントは。

ああ、知つてる。

浩次 そりや、言いとうねーけど、今さらじやけど、怨んだことも
 ある。怨んだ、親をな。昔はな、わしもな、口荒らして、つ
 らい思いさせた思う……。

浩次のかすかな鼻をする音。

一人仏壇の前で泣くようにお経を唱え始めた芳。

ふらついた足取りの靖が日本酒の瓶を抱えて店を覗いて、

靖 何？ 何？ どうしたあ？ まあ、飲みましようや、お二人
 さん。ね。いや、でも、わかる！ ホント、この人は、昔か
 ら、せこい抜け駆けばかりしてたから。それは、確か。ね。

浩次 お前に言われとうねえ。

居間に上がってきた浩次が、仏間と居間の間の襖をすっと閉めて座り、目の前の日本酒をさつと飲み干す。

浩次 (改まつて) あんな、二人共、いいか、聞いてくれ。おい、ちよつと、座れ。

靖 はあい、何でしよう。

幸雄 幸雄が酔つた靖を制しながら、それでも一人でじやれあうようになに座つて、

浩次 おふくろも、いざれ居なくなる。家もじやけど、墓んこともある。

靖 (だらしなく) あのーそれは、跡取りでしゅか?

浩次 それもある。

幸雄 後なら、翔一郎がおるが。なんだかんだ言つても、みんな出て行って、ずっと一緒に住んでたんは、悟志兄さんと陽さんと翔一郎だから。

浩次 いざれはな、いざれは翔一郎が、継ぎあいいんじやけど。あいつもボンボンじや。

靖 はあ?

幸雄 ちよ、もう、おい。

靖 あんなあ、あんまり、人のこと馬鹿にしたようなこと言わんほうがええよ。

浩次 黙つて聞け、心配してるんだわしは。

靖 ああ、わかつてるつて。

幸雄 なあにを? たまあに帰つてきて、こつちのこと何でもわかつたように。いつつもじや。

靖 おい。

幸雄 親んこと心配して何が悪い。兄貴が先に逝つたから。

靖 ほら、あれ。この人、あれ、おやじが大事にしてた備前焼の壺、勝手に持つてつたんよ。この人。

幸雄 え。

靖 ほら、離れの床の間の。

幸雄 マジ? 藤原啓のか。

靖 あー、バカバカしい、もうええ、話にならん。

浩次 あ、また、ごまかした。

靖 おい、お前こつち居るんだから、今度、登記簿取つとけ。

浩次 はあ? 何、また、偉そうに。それが人にものを頼む態度かよ。

靖 だから、必要なことじやろうが。

浩次 私は、壺はいくらになつたつて聞いてんの。

靖 襖が開いて芳が顔を出す。

幸雄 憶てる幸雄。

幸雄

靖、今日は、もうええわ。（二階に行こうと合図）

（浩次を指さし）結局心配なんは、自分らのことでしょうに？

浩次 なにを？

（ふざけたかんじ） 私ら、分家ですか。

（芳に） 大丈夫だから。

（絡むように、浩次と幸雄を指さしながら） あんたらは、一旦は捨てたんだろ？ ここを。帰るたんびに、偉そうに東京や大阪の自慢ばかりしどつたが。苦労話のつもりだつたかも知れんけど自慢にしか聞こえんよ。

幸雄 わかったから。

靖 苦労しとんは自分らばかりみたいなこと言うて。田舎で、こっちで、生活しとるもんは、樂してる阿呆じやぐらいに思つてたろ。……俺は、俺は寂しい。（だらしなく泣き出す。）

靖に絡みつかれて、あきれ顔、突つ立つたままの幸雄。

暮らしてみればいい。ここ的生活がどんだけ大変か。それにね、ふるさと、ふるさとて、どこに住んでも、一緒だから、東京や大阪の家がここに来るだけ。

おい、もうやめとけ。

はじめに、しかけたの誰ですか？ あん？ 自分の言いたいことだけ言つて、逃げるんですか？ あんたら、嫌で出てい行つたんだろ？

どこに住んでようが、みーんな働いて家族養つてる。仕事がつらいのは、東京だけじやない。しんどいのは、兄貴らだけ

じやなくて、

浩次 （大声） 勝手なことばかり言うな！

捨てたくて、捨てたわけじやない！ わしに、どうせい言うんじや。悟志さんおつて、陽さんがきて。出て行かんで、どうせい言うんじや！ おう？ お前は、おふくろに小遣いの一つもやつとんか？ 大学の学費、兄弟の世話になつて。今まで、礼の一つ言われたことがねえ。えらそうに、わしに説教か！

座卓が音をたてる。

立ち上る浩次のステテコのすそに泣くように、すがる芳。

浩次の腕が靖の髪を掴んでゆする。

倒れこむ靖

（悲鳴に近い声） やっちゃん！

靖の横に、倒れるように座り込む芳。

浩次の息が荒い。

芳

靖

はは、ごめん、（畳に顔を擦付け） かあさん、はは、ごめんね。

おい、もう。おい。

お互いの息遣いだけが聞こえて、

浩ちゃん。

無視する浩次

芳
告
て
……浩ちゃん、わたしんせいじやろうか？

芳須西の嫁のいうとおり、陽ちゃん。

芳　　このおばあさんが、昔、いじめたからじやろうか。

顔を見わせる幸雄と浩次。

幸雄 どしたん、急に、

芳
……さつちゃん、浩ちゃんの目は、あたしんせいじやから、
兄さんが持つてじやつたから。

幸雄 ああ、ごめん。

芳
こんな人、土手の彼岸花が、わからん言うて、泣いて帰つて……
：もうなあ、（か細い泣き声）悪いんはみんな私じやから。

やりきれない幸雄が、芳のすがるような目に居たたまれず、座卓周りを片付け始める。

おじいさんなんで早よ、迎えにこんのじやろうか。生きとる芳

浩次 誰もそんなこと言うとらん！
芳 陽ちゃん、逝くとき、私も一

告次

幸雄 かあさん、もう
ほんとうこなえ

みんな、ちゃんとした家があるので。靖もあんたもわざわざ

浩次 すこし、横になり、おい

幸雄が、台所から持ってきたリンゴ酢のコップを浩次に渡

ほら、これ、好きじやろ？　もうな、昔の「ことじや。なんも

かんも。

促され、座布団を畳んで、枕にし、畳に横たわる芳。目をつ

幸雄、押入れから、肌かけを出してかけてやる。

冷蔵庫にビールを探す浩次、冷えたビールがない

酔いつぶれている靖。
 芳の脇に座り、団扇で芳をゆっくり扇ぐ幸雄、機嫌悪く台所
 から戻る浩次に団扇を不愛想にバトンタッチ。
 幸雄が靖を抱えるよう、二階へ上がって行く。
 階段のきしむ音。

沈黙

（目をとじたまま）増え取ろう、しわ
 芳 なんや。（驚く）
 浩次 当り前じやがな。つるつるしてたら気味わりい。
 芳 あんた、いくつかな。
 浩次 直に七十。
 芳 ほうか、おおきゅうなられましたなあ。
 浩次 ……かあさん、あんな、わしな、あんな、わしもな、かあさ
 んがおらんなつたらな……もう帰つてこん思う。この家。寂
 しい、けどな。そうかいつて、東京へあなた呼ぶんもなあ。
 ……（溜息）兄貴がおればなあ。

芳 行つてみるかな、……岸本。
 浩次 ん?
 芳 ん、デイサービスか?
 浩次 ふん。

芳 ほおう。
 浩次 浩ちゃん。
 浩次 本当は、もう、逝かせて欲しいんよ。一人おつても、
 もう、いい加減にしてくれ！ すこし寝とき。休まれ。

深い溜息の後、居間の電気を消すと部屋は、靄がかつたブル
 ブル。
 芳 湿気を含んだ風と木々の揺れる音。
 浩次 おもむろに立ち上がる浩次。
 浩次 一人、家の中を見回し、深刻な面持ち。
 芳 店の外、ポストを見にでる。取り残された夕刊とA4の茶封筒
 に気づく。
 浩次 やつと点いてる外灯の灯りで、

浩次 月刊「楓短歌会 6月号」。陽さんのか。

浩次 居間にあがると夕刊と一緒に座卓にそのまま置いて、縁側から庭を見やる。
 浩次 開け放しの縁側から、葦が一匹、暮れかかる部屋の中を浮遊する。

浩次 おう、はあ、飛びよるが今年は、早いのう。

サンダルをつつかけて、庭に降りていく。

居間に一人横たわる芳、寝がえりをうち深い寝息。

誰もいない台所と店。

サツシからの風がレースのカーテンを揺らしている。

庭もその先の川土手の木々も、芳のいる居間からすべてが繋

がつている。

間

蛍が、芳の周りを浮遊する。風でレースのカーテンが揺れ

一人居間へ上がつてきた悟志、電気をつける。（白っぽい服
表、二つなる前六十才ばつ、の風貌）

芳悟志 かあさん。
はあ、悟志かな。
(寝ぼけ眼で、ゆっくり起き上がる) お帰

はあ、悟志かな。（寝ぼけ眼で、ゆり、早かつたんじやなあ、今日は。

芳 惜志 こんなどころで
ふん、浩次は？

悟志　土手に出て、董みどる。

芳語志　董もう出どんがな。おらいせいかせな堂じゃな。

芳
なん?

生き急がんでもええのになあ。

生き、急ぐ？

しつかし、
浩

からんかつた。土手に立つてゐる後姿が、おやじにそつくり

で、浩次つてわかつたわ。

ふふ、あんたもそうじやが

そうかあ？
わしは、違うだろ。おやじよりはいい男だと思
うナゾぶあ。

おとうきんもあんたも、ここらじや有名な一枚目でなあ。

おとうさんもあんたも、こらじや有名な一枚目でなあ。学校行く汽車でようけもらつとつたが、ラブレター。ほれ、あーの、かみの弁当屋の小林の娘が、あんたに熱上げて、頼みも

せんのに弁当持つてきて。ようもあんな不細工な顔して団々
しい子じやつたが。なあ。
もう、かあさん。

はにかんだ様に笑う悟志。
肌がけを押入れに入れて腰を伸ばしたり、背伸びをする芳。

相変わらず、かあさんは、元気じやな。

なんか今日は体が軽いは。

なんか、急に若返ったみたいに、背中がしやんとしどる。

一人ウキウキした様子の芳。

芳	悟志	五月じやゆうのに、もう梅雨に入るんかなあ。
芳	悟志	ほうじやろうか。
悟志	悟志	さあ、おらん？
悟志	悟志	うん、わしにや、姿がみえん。
悟志	悟志	ふーん。どこ行つたんじやろう。
悟志	悟志	実家にでも、帰つてるんかな。
悟志	悟志	(手を止め、気にいらぬ様子) 大原へか?
悟志	悟志	(ふつと笑つて) もう、ええが、かあさん。
悟志	悟志	ほおう?
悟志	悟志	たまには。
悟志	悟志	そいでも、
悟志	悟志	陽にも息抜きがいるんよ。
悟志	悟志	（悟志、芳の口調に合わせて一緒に）
悟志	悟志	「私しや、なんも聞いとらん。」
（不思議そうに）	悟志	驚く芳。一人、愉快そうに、幸せそうに暖かく笑う悟志。

浩次 いつも、そんなことばかりい言うで。

芳 は？ ほうかあ？

悟志 ああ、ずーっと。

芳 そう？

悟志 そう。かあさん、いつも言つてた。

悟志と芳、二人顔を見合せ
「私しや、なんも聞いとらん。」

（はにかむように、嬉しそうに）
ほうか、いつも言うとるか？
ああ、

風に揺れるレースのカーテンを少女のように、体にくるりと
巻き付けて、おどける芳。

ほうか、ほうか、言うとるか。
ああ、かあさん。もうやめえや。

いけずなばあさんじやのう、ほんに、私は。
芳と悟志、顔を見合させて、静かに笑いあう。

風に揺れるレースのカーテンが、二人の時間を推し進める。
悟志 $\frac{1}{2}$ サイズの茶封筒に気が付き、しげしげと眺める。
どこか寂し気な様子。

悟志 はあ、あんた、なんか白い顔して、気分でも悪いん?
芳 少し。……ああ、蛍はええなあ。
悟志 え?
芳 ほら、蛍。毎年、こうして姿見せてくれる。邪魔にならんよう
うに、静かーに飛んで。うれしいような、哀しいような、そ
んな、なんか、
悟志 はかないような? (にやりと笑つて) あ、ちごおとつた、わ
たしや、歯がないじや。ほれ、総入れ歯!
芳 おどけて、歯並びを見せる芳。
悟志 じやれあうように笑う二人。
悟志 いつまでたつても、かあさんは、頭も口もシャンコラじや
な。
悟志 こんだあ、シャンコラばあさんか。あんたも元気ださにやお
えんよ。若いんじやから。
悟志 ああ、ほんとになあ。
芳 それ、陽ちゃんの。また来たん?
悟志 (茶封筒を眺めながら) ああ、楽しみにしどつたもんなんあ、
これ。
芳 毎月、届いたら部屋に籠つて、ずっと読んどる。何でも、自
分の分が、どこに載るかが大事らしいは。

悟志 そんくせ、恥ずかしがつてなかなか見させてくれんで、ほんに
あいつは、いつつも……仕事辞めさせて、短歌が生きがいにな
なつとつたからなあ。どこ行くんにも、メモ帳と鉛筆、離さ
なんだ。
悟志 その、楓の会の、ほれ、あっこに飾つた、賞もろうた時、あ
れは見せてくれたんよ。
悟志 ああ、嬉しそうだつたなあ。本当にうれしそうだつた。
悟志 鴨居にかけてある表彰状を見上げる。
悟志 立ち上がり、本棚から陽の自費出版した歌集を取りだ
し、丁寧に表紙をなでる。
悟志 「草の家」
悟志 中をみたり、匂いを嗅ぐそぶり。
悟志 付箋のページを開けて、
悟志 「ふるさとの川土手の柿たわわにて 草の家には人影のな
し」
悟志 表紙だけなら、与謝野晶子にも負け取らん、りっぱな歌集。
悟志 あんたも、よう、してやつたんじや、
悟志 退職金があつたけんな。賞もろうたお祝いじや。
悟志 そりや、誰でもしてもらえるもんじやないけんな。あん
人、喜んで、まあ。仏さんにもあげまして。子供みたいに何
回も眺めて。みんなに配つて。
悟志 抱いて寝よつた。

芳 あれまあ。

浩次 わしが、もとおらん（甲斐性がない）け。苦労かけた。

芳 お嬢さんだからなあ、陽ちゃんは。

悟志 ほんまは、わしんとこ来るような女じや、無かつたんよ。社長秘書だつたけんな。陽は。社長の通訳しよつたんじやけな。

芳 そん話は、ようけ聞かされどる。女子大の英文科出た、お嬢様で、こげな田舎に嫁がせるんは、かわいそうじや言うて。大原のおばあさんから、何回嫌味言われてきたか。

悟志 そいでも、あんだけ偉そうに言いよつた大原の醤油屋は、今じやのうなつて、こんはかり屋は、まだこうして続いとる。家は、とつくに開店休業じやが。陽が来た時からずつと。そうかもしけんけど。ここらじや、知らんもんはおらんよ。昔は、手広くやつとつたんじやけん。おじいさんが、体壊して、あんたらも「はかりや」やこ先がないつて。そいじやから、今じや、こんな大人数の家に、ようきてくれたんじや。大きいばあさんと病氣の父さん、かあさんと、下に弟が三人も居るところに。

悟志 昔は、それが当たり前よ。

芳 工場長から、話もろうた時、絶対わしやこ、断られる思うた。わしに、女子大出の嫁さんなんぞ、想像できんかった。あいつ、わしが学歴のこと気にしとん知つとつて、同窓会や

芳 二、なかなか行かんで。行きやええのになんだかんだ理由つけて、

悟志 そうかな、そんなことがあつたんかな。

芳 苦労かけたあ思う。それなのに、わし、なかなか、やさしゆうしてやれんで。照れくそつて、一緒になつた時分は、あいつの方が、給料良くて……なんやかや言われて、わし、今更、もうええが。

悟志 月今のこれも、早よ見たいだろうに。また、陽の歌が巻頭に載つとるかも知れん。

芳 封筒を開け、中の冊子をだそとすると、思いとどまる悟志。

悟志 封筒を大事そとに座卓に戻す。

芳 じき、ご飯せにやいけんのに、陽ちゃん、まだかな？

悟志 台所に行き、何やら探し出す。棚の扉を開けたり閉めたり。

悟志 どうしたん？ 何探してるん？

芳 うん、砥石どこじやつたかな？

悟志 砥石？ 上ん棚にあろう？

芳 ここか。

悟志 どうしたん？

悟志、流しの上の棚から、砥石、下の棚から出刃包丁を出して研ぎだす。

芳
急にどうしたん?

悟志、真剣な眼差しで、包丁を研ぐ。

芳
陽ちゃんに頼まれたん?

芳悟志あんた。

悟志 悪いって、言いよつたけん。 うせんって。

芳 何で 急に 魚でも おろすんか？

悟志 この出方も、そろそろ限界じや。危ないんよ。これを研ぐんは、気いつかう。ひよつと、手え切つてもなあ。毎年、正月

芳 あんた、まだ、夏も来んのに

芳
苑
?

らんと。怖がつてようせんから。

悟志 ああ。

芳悟志 え？ かあさん、陽は、もう帰らんよ。きっと。 芳ちゃん、早よ帰ればいいのに。

黙つて、研いだ包丁を、大事そうに棚にしまう悟志。

引き出しから風呂敷をだし、鴨居から表彰状の額を取り外し、歌集と一緒に包みながら、

悟志
あいつ、帰らんかも知れんけど、わし、気がかりじやつた

芳悟志、あんた、何しどん。どうかしたん？

悟志 わし、もう行かなきや。

芳行くべ

悟志 かあさんも行けはいいんよ。
芳 どこに? 行くつてどこに行くんよ、ちょっと悟志。

芳 なんよ。

芳
自分の行きたいところは？

芳
行きたいところへで話つてもなあ……（急に足を引きずり、

悟志

人はみんな、どこにでも行ける。あるじやろ人はみんな行きたいところが。

芳夢や二、……みとりやせん。

悟志が、届いた茶封筒（陽の短歌会冊子）も風呂敷に包もうとするが、それを風呂敷ごと芳が奪いとつて、

芳の手から、風呂敷を取つて
哀しそうな笑みを浮かべ、立ち去りかける浩次
芳の方を振りむいて、

悟志 ごめん、かあさん。 芳悟志あんた、ちよつと。

芳（声が震える） そうさなあ、こ、こ。

(声が震える) そうぎなあ こ こ あたしは こ う ん、 こん家がええ。 あんたと陽ちゃんと翔一郎と、 盆や正月 こは、 告欠夫帰も幸進も清んと二もみんな帰つて、 きのこゆ

悟志 これ、陽に持つて行つてやるは。あいつの宝じやから。
芳 があいつに。これだけは、あいつ本当に喜んで。わし
悟志、あんた知つとん？ 陽ちゃんおるとこ。

悟志
あー、そうかあ。楽しかったなあ、昔は。みんな、こん家に
集まつて。

私はこん家がええ。こん家にまたみんなで一緒に暮らした
い。

悟志 みんな?

だから、悟志あんたも。な？ どこにも行かんで、こん家に居つて。な？ お願いだから。じきに、陽ちゃんも浩次も翔一郎も、幸雄も靖も、みーんな戻つてくるけ。いけはずせんけ。優しゅうするから、お願いだから、悟志ここに居つて。みんな帰つてくるから。（細く消えそうな声）お願いじやから

悟志 かあさん、またそんな、夢みたいなこと言うて。

● 第四場（7月半・悟志の三回忌の後）

仏壇の前には、いつになく沢山の御供。

店先にロードバイク。

セミの声 午後の強い日差し。

居間では、浩次がステテコ姿で、くつろいでいる。

テーブルには、お膳を広げた名残り。

喪服のままの翔一郎と昌枝が上がつてくる。

翔一郎 暑い、暑い、暑い。

昌枝 ああ、もう、いや、ほんと、いや。

浩次 おう、ばあさん、機嫌よう行つたか。

昌枝 いいわけ無いでしょ。全く！

翔一郎が角を出す素振り。

昌枝 転びそりだから、支えたのに、いらんつて手はねられるし、

座らそりとしてもすつざい力で抵抗して。「子供扱いすな」つ

て。そのくせ、ヘルパーさんには、につこにつこして。お金

なんか渡そりとするんよ。

渡すふりして、もらつときやええが。

（あきらかに悪意をもつて芳の真似）「いつも、やさしゅうし

てもらつてるのにお中元もしとらん聞いて、気が利かんで、

すみませんねえ」

浩次 ほお、外面いいからなあ、藤井のもんは。
(再び芳のまね)「今日は、長男の三回忌で、嫁は思うとる

し、自分がおらにやことが進まんでなあ」もう、大変だつた
んだから。嫁が全部悪いんだつて。全部。もう、いや、次は
絶対行きません。気が利かないもん。

浩次 ふ、

翔一郎 昌枝おばさんは、本当に良くしてくれます。倉田のご実
家からも御供いただいて。本当にすみません。(頭を下げる)
昌枝 やめてよ。兄も気にしてるのよ。違うの、翔ちゃんに言つて
るんじやなくて、この人よ、自分の親なんだから。

浩次 もうやめ。次はわしが行つちやる。

昌枝 へえ。

翔一郎 ホント、あれじやヘルパーさんもタジタジジや。幸雄おじ
は?

浩次 このくそ暑いのに、靖と川行つとる。

翔一郎 ハエかな、もつと日が陰らにや、釣れんじやろう。法事に

座らそりとしてもすつざい力で抵抗して。「子供扱いすな」つ
て。そのくせ、ヘルパーさんには、につこにつこして。お金

なんか渡そりとするんよ。

浩次 渡すふりして、もらつときやええが。

（あきらかに悪意をもつて芳の真似）「いつも、やさしゅうし

てもらつてるのにお中元もしとらん聞いて、気が利かんで、

すみませんねえ」

かつたが。

昌枝 全く、お兄さんの三回忌だってゆうのに。やつと、三人そろつたのに。お酒が入つて、お寺さん帰つたらもう。

浩次 わし、一人阿呆みたいじや。おふくろのことが無かつたら、こんなことになりやせん。

翔一郎 ひでえな、ばあさんに早よ逝けつてことか。怒るでえ、聞いたら。

浩次 おい、知つとつたか？

翔一郎 何。

浩次 幸雄、陽さんとメル友らしいぞ。

翔一郎 ああ。

浩次 知つてたんか。

翔一郎 喜んでた。おかしいの送つて来るらしい。メールみてよく笑つてる。

浩次 前からか。

翔一郎 うん。砂丘で逆立ちして写真送つてきてた。もう、笑つたわ。

昌枝 何それ、見たーい。

浩次 つまらん。

翔一郎 おやじ死んでから、時々心配して連絡くれて。お袋も可愛いみたいよ。今でも。

昌枝 さつちやん優しいとこあるもんね。

翔一郎 よく聞かされるんが、若い頃、おやじと喧嘩して裏の土手から川見ると、幸雄おじが靖さんの手ひいて、泣きながら来てくれたんじやつて。飛び込むと思って。心配して。

翔一郎 急だったから、一度、本当に、うん、盆には、帰してやりたいんよ。なんとか。

翔一郎 ステテコのまま一人縁側へ逃げ出し、外を眺める浩次。釣りをしている第二人の様子も気になるらしい。

翔一郎 幸雄おじが丸坊主で、学ランで、靖さんはランニングシャツで。二人共はだしで来たらしいわ。で、自分も気が付いたらはだしだつたつて。

昌枝 まあ、やだ、可愛そうに、よっぽど、お義姉さん（かすれ声）

翔一郎 どしたん、はは。

昌枝 あー、もう、ほんと、なんか、やだ。

翔一郎 あほか、お前。

昌枝 あなたには、わからないでしょ！

翔一郎 いや、お袋も何があったとかは言わんのよ、細かいことは。でもそん時は、それで、思い留まつたつて。

昌枝 ほんと、ねえ、ほんと色々あつたもんねえ。この家、ほんと大変。（浩次に当つてつけ）

昌枝 残念だつたねえ、今日は。でもまた、ね。大丈夫よ。

翔一郎 ……なんか、最近、大分、瘦せて。

昌枝 そうかあ、しようがなかつたわよ、今日も暑かつたもんねえ。お墓。

翔一郎 輸血の回数も減つて、あまりしてくれなくなつてきた。

昌枝 良くなつてきてるからぢやないの？

翔一郎 いや、回復の見込みのない輸血は、厚労省からストップかかるらしい。

昌枝 何それ？

翔一郎 我慢強いのも、考えもん。痛いとか、苦しいとか、もつと言つてくれたら……本当にあの人、

昌枝 ん？ 何？

翔一郎 実は、本人は今日、坊さんに、戒名頼むつもりだつたみた

い。

昌枝 え、

翔一郎 考えたくないけど、ね、なんか、あの人、もう、覚悟、（声がつまる）

昌枝 翔ちゃん。

翔一郎 あんた、頼んできつて、俺、ふざけんなつて怒つて。まだ居つてもらわんと、俺、孝もやつと、学校……

（涙を必死にこらえて）ああ、本当に、おばさん、俺、まだ

何もお袋に、子供ん頃から、ずっと、

昌枝 えらいねえ、（泣き声）翔ちゃんもお義姉さんも。翔一郎 （泣きながら、溜息）親不幸してきたから……。

肩を落とす翔一郎の背を撫でながら、

昌枝 お義姉さんも気にしてるだろうから、早く報告してあげたら？ お盆には、帰れるつて。ね大丈夫。

翔一郎 うん、盆に親父が帰つたら、まだ連れてくなつてよう頼んでもらわにやいけん。

昌枝 そうよ、こんな立派な息子が待つてゐるんだから。

翔一郎の背を愛おしそうに撫でる昌枝。
縁側から浩次が、能天気な様子で戻る。

慌てて取り繕う翔一郎と昌枝。

浩次 まあ、やれやれじやな。これで一つ片付いた。次は盆か。お

前も陽さんや、ばあさんや大変じやな。今日は泊まるんか？

翔一郎 あー、いや、光子たちが買い物から帰つたら、病院よつてその足で帰るわ。明日早番だから。

浩次 そうか。

翔一郎 まあ、おじさんたちが、五月に、ばあさんの施設の段取りしどつてくれたから助かつたよ。ほんとお世話になりました。

浩次 わしら、暇人じやから。幸雄はもつと暇人じや。使えばええ、言つといたから。ふらふらせんと、こつちに居つてばあさんの世話をえつて。

翔一郎 それでけんかしたん？
 昌枝 居ない時は、気になつてしかたないくせに。
 浩次 ほんとにつら勝手なことばかり。
 昌枝 もう、今晚は呑まないでよ。さつちやん今日泊まるんだから。
 翔一郎 まあ、事件だけにはならないよう。僕が事情収せにや
 いけんくなる。勘弁して。仕事増やさんで。
 浩次 阿呆か。知らん。

光子とアイスを食べながら翔一郎の子、孝が入つてくる。
 孝 ただいま。
 光子 帰りましたあ。

孝 おつきいばあちゃん帰つたよお。見て、アイス。
 光子 もう、言うこと聞かなくて、帰つてからつて言つたのに。
 孝 だつてね、溶けてきちゃうでしょ。

昌枝 おかげりい。いいねえ、おいしそう。光子さんごめんなさい。つい。買い出し頼んじやつて。
 光子 いえいえ、スーパーで涼んできちやいました。
 孝 おつきいばあちゃんは？
 浩次 知らん。おつきいばあちゃんは、ちいつちやくなつてどつか
 行つた。
 昌枝 もう。ねえ、おつきいばあちゃんは、病院帰つちやつた。
 孝 えー、おつきいばあちゃんも、病気なん？

昌枝 ねえ、どうしたんでしようねえ。元気だったのにねえ。変で
 浩次 すねえ。
 光子 おい、川行つてみろ、おじさんたち釣りしとる。
 光子 あ、いえ、もう。
 孝 パパ、川行きたい。
 光子 だめ、もう帰らなきや。
 孝 えー。
 光子 川はまた今度。陽ばあちゃんどこ行かなきやな。
 浩次 すいません。
 光子 そうか。
 昌枝 ごめんなさい、忙しいのに。
 光子 いえいえ。
 翔一郎 さあ、じやあ、忘れもんないか？ 帰るぞ。陽ばあちゃん
 孝 にお顔見せてあげようね。待つてるから。
 翔一郎 パパ、あれは？ 陽ばあちゃんのお歌の本は？
 孝 翔一郎、あ、そうだ、お前、えらいなあ。パパ忘れとつた。
 孝 もう、パパ、すぐ忘れて。

孝 大きく息を吸い込んで得意げに孝がたどたどしく陽から聞か
 されて覚えた短歌を詠んじる。

孝 「病得て 知る子や孫の優しさを 我晩年の宝となさむ」
 この孫はね、僕のこと。本に載るんだつて。ね、ママ。

皆驚く。

翔一郎が、あわてて陽の短歌の冊子を探しだし連鎖してみんな慌てた感じで探し出す。

孝 うん！
昌枝 そおう。すごいねえ。でもね、ずっと生きてきたのは、このおじちゃんも一緒よお。

浩次 おい、わし、どつかで見たぞ。茶色の封筒に入つとるやつ。

昌枝 あの、ほら、前回来た時の6月号は、もう届けたんでしょ。

翔一郎 それが、ばあさんに聞いても見つからんで、まだなんよ。

昌枝 えー、お義母さんに言つといたのに。

孝 6月号は、陽ばあちゃん持つてるよ。

翔一郎 そうか、そうだっけ。

孝 7月持つてきてつて。8月も来てたら一緒に、

翔一郎 あつた、これだ。ばあさん仏壇の中あげましてるが。

昌枝 早く持つて行つてあげなくちゃね、孝君えらいねえ。

茶封筒を渡されて胸に抱える孝、得意そう。

孝 いい歌が出せたんだつて。

昌枝 そおう、楽しみだねえ。

孝 鉛筆、看護婦さんが削つてくれるんだつて。僕、切手、貼つてあげた。

昌枝 そおう。

孝 陽ばあちゃんね、ずーっと、ずーっと生きてきたんだつて。まだまだ、頑張るんだつて。ね！

翔一郎 そう、孝、運動会に呼ぶんだろ？

孝 うん。ずっとね。でね、陽ばあちゃん、今がね、一番しあわせつて、言つてた。ね、ママ。
昌枝 ステテコ姿で、大あくびの浩次。
孝 うん。ずーっとね。でね、陽ばあちゃん、今がね、一番しあわせつて、言つてた。ね、ママ。
光子 ……。

顔を見合わす浩次夫婦。

光子 あ、なんかね、そんなこと、……。変ですよね、今が一番、

て……。

みんななんとは無しに、気まずい感じ。

それぞれに帰る準備や台所で。

翔一郎 さあ、じゃあ、今日は帰るは。おじき達によろしく言つといて。しばらく居るんでしょ。

浩次 まあ、そなあ、わしらと幸雄は、暇じやしな。ゆつくりして行くは。ばあさんとこ行つたり、陽さん見舞つたりな。盆まで居つてもいいけどなあ。

翔一郎 すんません。色々。また、連絡します。

浩次 どうせ、東京帰つても、だれも寄り付かんし、顔見せり

や、金目当てじやし。

翔一郎 もう、そんなこと言うから余計、

昌枝 本当にねえ、こういうところがねえ。

翔一郎 おじさん、これからは、可愛い年寄りだから。頑張れ。

浩次 あほくさ。

昌枝 (顔をしかめて) ムリムリ。ふふ、じや、お義姉さんによろ

翔一郎 しくね。私達、明日、行きます。

光子 すいません。失礼します。孝、

翔一郎 ジや、ほら。

孝 ぱいぱい。

昌枝 ぱいぱい。

外でなにやら声がする。(以下 舞台上では見えず)

帰りがてら川から戻つた幸雄と靖と挨拶している翔一郎。庭の井戸で、幸雄と靖が、釣つてきたハエを処理しだす。

縁側から、その様子を見ている昌枝。

昌枝 釣れた? ふふ、すごいじやない。それ筐?

庭からなにやら、声がする。

昌枝 その井戸まだ使えるんだあ。

浩次が縁側へ来る。

二人並んで、庭を見ながら、

昌枝 (喪服の昌枝に) 早よ、着替えてくりやええが。暑苦しい。

浩次 あんなことするんね。ほら。お腹出して、へえ、エラから筐

をさしてぶら下げる。ふふ。

昌枝 (縁側から大声) おい、しつかり腹だして洗うとけ。焼いて

酔で食うぞ。

昌枝 はは、あんなに。(庭に向かつて手を上げて) すぐおい。

……楽しそう、あの二人。

間

昌枝 靖さん、定年したら、恭子さんの実家、手伝うんだつて。

浩次 ほおう、工務店をか。

昌枝 うん、同居するみたい。恭子さんが言つてた。

……そうか。

間

昌枝 土手の銀杏、切つたんじやな。

浩次 うん。須西のおじさんが、市に言つて、切らせたんだつて。

昌枝	私たちも一緒に埋もれそう。
間	間
浩次	陽さん……盆までもつかな。
昌枝	……。
浩次	あの土壟、子供ん頃、親父がしたんよ。覚えとる。
昌枝	ふーん。
浩次	町内の連中たのんで。なんか知らんが、うれしゅうて……な
昌枝	んか知らんが。
昌枝	お義母さんも？
浩次	大きい声でよう笑つて。バラ寿司せつせと作りよつた。
昌枝	ああ、評判よかつたもんねえ。
浩次	ああ（深い溜息）土壟、親父、悟志さん……銀杏の木か。
間	間
浩次	一つずつ、亡くなつていくな……大事なもんは……。
店	店の外に人影。

薬屋

ごめんください。ココ薬品ですが
あ。

完